

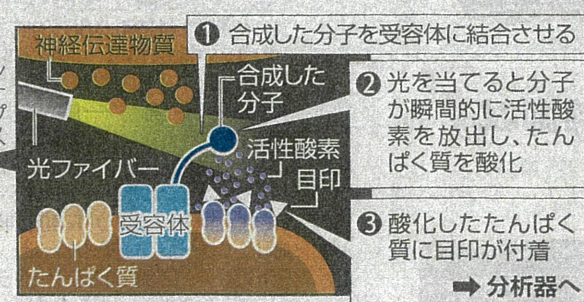
トピックス

脳内たんぱく質多数検出

京大チーム 新技術開発

脳内を信号が伝わる際に働いている多数のたんぱく質をまとめて検出できる新技術を開発したと、京都大の浜地格教授(生物有機化学)らのチームが発表した。マウスを使った実験で記憶や学習に関わる脳の機能を分子レベルで研究でき、脳の病気の治療法開発などに役立つという。論文が国際

科学誌に掲載された。脳の神経細胞同士がつながる部分は「シナプス」と呼ばれ、一方の細胞が放出した神経伝達物質を、もう一方の細胞の受容体がキャッチして信号が伝わる。受容体の周囲には多数のたんぱく質分子が集まり、その数や種類が神経機能を左右すると考えられている。



シナプス
神経細胞
受容体の周囲に集まるたんぱく質を検出する仕組み

チームの田村朋則講師(生物有機化学)は「この技術で脳機能の詳細な解析が進めば、てんかんなどの発症の仕組みの理解や、治療法の開発につながるのではないかと話している。